
音色

だぶ-ぱ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音色

【Zコード】

Z3551C

【作者名】

だふ・ぱ

【あらすじ】

アーティストを夢見る音痴な千花。天使の歌声を持つ不良の祥太。やつてみなきやわからない青春がある。

出来心

明日香サンに憧れた。

明日香サンみたいにあのでっかいステージでキラキラ輝きたい。
たくさんの人と笑顔を分けあってたくさん的人に希望を見せて

最近デビューした五人組バンド「tomorrow」はシングル
売り上げランキング、着うたランディングで3ヶ月連続一位を獲得し
ている大人気アーティストだ。

ボーカルは木村明日香。

かつて、あたしん家の隣人で勉強を教えてもらったり遊んだりして
いた、綺麗なお姉さんだ。今はもう東京に引越してしまつたが思え
ば自慢話。彼女は子供の頃からの歌手になるという夢を22歳で叶
えた。

そんな明日香サンのデビュー前の小さなステージで歌つた姿を見て
当時13歳のあたしも歌手になりたいと思つた。

それが始まりだった。

出会い

『千花？どうしたの？大丈夫？』
お母さんが部屋に突っ込んできた。

「え、何？？」

『あれ 今叫んでなかつた ？』

「別になんも 」

『そう 最近ここの辺で露出狂ができるって話を聞いたから出たかと思つたわあ』

そう言つてお母さんは部屋を出てつた。あたしは首をかしげてからまた歌い出す。

『千花！本当に大丈夫なの！？』

あたしは音痴だつた。SM@Pの人なんてもんじやない。

『何？今頃？どんだけだよオ - (笑)』

親友の莉子は笑つた。はつきり言つて莉子には笑われたくなかつた。

『莉子はパティシエどおなつたんだよお？』

『え - あたしは 順調だつ - の』

莉子にはパーティシェになる夢があつた。だけど デザインセンスが無いうえに、味音痴という絶望的な性格があつた。

『あたしたち 下手の横好きじゃんね -』

『マジかあ - 好きだからしょ'つがないもんなんあ -』

好きなのに、下手。

こうしてあたしのアーティストへの希望は弱冠かされた。

『千花、授業行かないの?』

「ん、やる気なくしたあ、いいや」

ああ、夢までは遠いなあ

あたしは裏庭から校内の最上階の階段へとサボる場所を移した。

「あれ」

窓がないのに風が来てる。屋上の扉が開いていた。すごい鍵の所がめちゃめちゃになつてた。誰かが屋上に上がるために鍵壊しちやつたんだ。

あたしの好奇心がちょっと笑つた。

「す、」「ー、」

初めて屋上に上がった。強い風が吹きまくつて気分がいい。

屋上の端っこに行つて下を見渡してみた。

「田舎だなあ」

田んぼと山ばかり。でも、それが逆に気持ちいい！

もつ、あぐびが止まらない

素敵！

涼しい風に乗つて綺麗な音が聞こえた気がした。余計気分が良くな
る。

『きれいな水をあげよオ ぞむ・まあま・戸惑う人の目に
音じやなくて声だ！ すごい！！』

あたしの眠気は一気に吹つ飛んだ。立ち上がって辺りを見渡す。

『僕を知つてゐるだらうか もそばにいるのだけど』

誰？どこにいるの？

見つけなきや こんな歌声 逃がせない！！

『ワン！』

え！？犬！？

振り向くと非常階段から子犬が飛びだして來た。子犬はそのままあ
たしに向かつて突つ走つて來てあたしにぶつかつて跳ね返つた。

『キヤンッ』

「 大丈夫？」

子犬は抱き上げても警戒せずあたしの手をペロペロ舐めた。

「かわいー」

『 キュウ！』

顔をあげると、そこには佐原 祥大が立つていた。

オレンジがかつた茶色の髪を肩まで伸ばして前髪を結んであげてい
る。第3まで開けた青いシャツ、制服のズボンを片足だけまくつて
いた。

同じクラスの不良。

ろくに授業もでない、学校内で喧嘩する、煙草吸つて停学になるなんとなく孤立している男だった。

『返してくんない?』

「え?」

『その犬、返して』

「あ、うん」

あたしは子犬を下に下ろした。

『クウ・ン、ワン!』

子犬はあたしを見上げて靴の上に足をかけながらしつぽをふりまくつた。微笑ましい光景だったけど佐原は眉間にシワを寄せて子犬を抱き上げた。

そのまま何も言わず背を向けて非常階段へと戻つていぐ。

「あ、ねえ! ねえ、佐原くん!」

あたしは慌てて佐原を呼び止める。佐原は背を向けたまま立ち止まつた。

「さつき、歌つてたのつて佐原くん?」

『だつたら?』

愛が呼ぶほづく。

あの天使の歌声は佐原くんだった。

もう感激が止まらなかつた。あたしの頭の中で一気に未来予想図が構成される

「 素敵！あたしどバンド組もうよ！—決まりッ！—」

『 あ？』

佐原くんは振り向いた。初めて目を合わした。

「佐原くんって飴系好きなの？　あ、これ！あたしも昔から好きなんだあ！いや、気が合ひねえ！」
『触んな！帰れ！』
「もうちょっとフレンドリーに行こよ。そんなツンツンしてたらレコードティング楽しくないよ！」
『意味わからねえよ！ちょ、キュウ返せよ！』
「い、じゃん！めっちゃなつこてるよー。」

非常階段であたしは佐原くんをバンドに誘つてみれば普通の人だった。まずは、仲良くなることー。

佐原くんは孤立している人だつたけど喋つてみれば普通の人だった。ただちょっとシンシンしてるけど

佐原くんが大事にしているこの子犬はおそらくただの柴犬。佐原くんはこの子犬をキュウと名付けているらしい。佐原くんは鞄いっぱいにいろんな飴を入れている。

キュウが佐原くんの鞄の中に顔を突っ込んだ。佐原くんはそれを見て赤い飴をキュウの口の中に入れた。

そうか、飴を食べるのは佐原くんじゃなくてキュウなんだ。
キュウは上手に飴を噉み碎いた。佐原くんはすかさずキュウの口に
飴を入れる。消費が早いからこんなにいっぱい飴を用意してるんだ
あ。

いろんな事に気がつくうちにあつといつ間に時間は経つてチャイムが
なった。

佐原くんは最初は帰れとか死ねとか言ってたけど、チャイムがなる
頃には黙つて隣に居させてくれた。

あんな歌声してるとんだもん。悪い人なわけないじゃん！

結局次の授業もあたしは黙つたまんま佐原くんとキュウといった。

シンデレラ

『え！？佐原！？』

「うん！マジあれは天使の歌声だよ！」

『千花 あんた佐原の事知ってるでしょ？佐原なんか誘つて』
「ちょっと絡みづらいかもしないけど、話してみりや・普通の人
だよ？歌もめっちゃ凄いし！』

『あたし 千花には普通に生きて欲しいよ』

「大丈夫だし！あたし・絶対佐原くんとバンド組んで成功させてみ
せるからー！」

『 千花の事・応援しないわけじゃないけど 本当に叶うと思つて
んの？夢は叶うなんてシンデレラだよ？』

確かに、あたしお父さんはマラソン選手を夢見ていたらしいけど
今現在は朝ラッシュでもみくちゃにされるただのサラリーマン。
俳優を夢見るお兄ちゃんだけ仕事に追われて、夢見てたことが覚え
忘れてる。

あたしが希望に満ちている今だって10年後には
「そんな時もあつたねえ」って若かったあの頃として終わっちやう
のかもしない。

「 分かってるよ。でも、あたしやりたいんだ。下手だけど、それをフォローしてくれるのがきっと佐原くんなんだ。約束するよ、莉子に夢叶えるって約束する」

『 そつかまあ、今だけだからねー。』

「 ありがとうーーー。』

莉子は昔からあたしを認めてくれる。

お母さんよりもあたしを知りつくりしているかもしれない。

あたしも、莉子のパーティションになりたいって夢、応援しようと思つてゐる。

佐原くんと上手くバンドを結成できたら

佐原くんは皆に歌を届けて、あたしは隣で皆に顔色を届ける。

あたしの未来予想図はどんどん膨れていった。

『ちゅーじで、今日は全部活休み。全員、学活が終わったら即帰宅しちゃ相川、聞ことんのか？』

あたしは視線をそのままに片手をあげた。

『ホンマかいな』
先生はあたしを全く知らない。あたしはいつも見えてちゃんと話とか聞いてんだっつーの。

あたしの視線の先には佐原くんがいた。
たつたいま校門を跨いで昇降口に向かって歩いてくる。

「ちゅんと来たんだあー」

昨日、別れ間際に

「明日も誘うに来るからーちゅんと学校来てよー信じてるでー！」

ちゅんと来てくれた。
つて言った。

『あ・ッ！ 終わったあー千花、トイレ行こおー。』
「うん、あのさ、ちよつと匂いが匂ひへんない？」

『うん？ いいよ』

あたしは莉子を誘つて屋上へ向かつた。

『うわ、す、リッ、コレ千花がやつたの？』
「違うよ、最初から壊れただ」

あたしは莉子に向かつて人差し指を口の前にあてたポーズをした。

静かにして。

の意味。そのままあたしは莉子を連れて屋上に上がつて非常階段の

手前まで行った。

『 ひとりよがりの愛情は君に届かずことをよつたあ 』

やつぱり佐原くんは非常階段にいた。今日も歌つてる。

莉子はその歌声を聞いてあたしの肩を叩き口パクで佐原?と聞いた。
あたしはうなずく。

莉子は目を丸くして驚いた。

あたしは佐原くんに近づいて後ろから脅かそうとした。だけど脅かすより先にキュウに見つかって吠えられた。

佐原くんはあたしに気づいたけど振り向きはしなかった。

「ポルノ 好きなん?」隣に座りながら聞いてみた。

『 だつたら?』

「そつかあ - あたしはね、昔から檜原敬ゆきが好きなんだあ

『 』

「あとね - tomorrow - s 好き! - あたし ボーカルの木村明
田香サンと知り合いなんだよ!」

『 』

「まあ、人の白糖話はつまんないよね!」

いつの間にか莉子はいなくなっていて、あたしは次と次の授業をサボる事にした。

忠犬キュウ

気がつくとあたしは寝ていたみたいで霞む視界の中は夕日色だった。

『 もつくるえず言葉になる 足りないなら つめてよ 』

佐原くんが歌ってる。階段によりかかった体を起こして佐原くんを探した。

『 はよ 』

佐原くんはあたしのすぐ上にいた。

「 うん - はよん ふあッ 」

しばらくして佐原くんは突然立ち上がりて屋上を出でていってしまうた。あたしはキュウを抱いて佐原くんのあとを追っかける。

「 あ - あたし ちよ - 鞠取つてくれるから待つて - 」

慌てて教室に入った。鞄を取るときあたしの机の上に『さき帰つてるよ！莉子サマ』と書いたメモがおいてあつた。あたしはそのメモをポケットに入れて窓に身を乗り出す。

門の所に佐原くんが立つていた。あたしは走つて階段を降りて佐原くんの所に向かつた。佐原くんは25メートルくらい先で再び歩き始めた。でもやつくりだつたからすぐについた。

あたしは佐原くんと2メートルくらい間を開けて並んで歩く。

学校を出て、坂道を下つて細い路地に入った。

路地を出て、国道に出た。ここら辺で一番大きな道路だ。

腕の中でキュウがむずむずした。勘でちょっと戻つた所のコンビニからビニール袋をもらつた。

戻つてくると予想通り立派なウンコだった。キュウは胸を張つて和んだ顔をしていた。

佐原くんはすでに国道を横切る横断歩道の向こう側。でもちゃんと待つてくれた。

あたしは信号が青になるのをまた。
すると突然キュウがほえだした。

キュウは慌てて横断歩道の向こうに走る佐原くんがけて走り出す。

トライックも気にせず。」

「 え？」

あつとあたしは佐原くんと同じ事を思った。

「キュウー！」

『！』

たくさんの人々が横断歩道を埋めつくす。

トラックは避けよつとして信号機に激突し、煙を吹いていた。

トラックの荷台に乗つけられた鉄パイプは道路に転がって、そこにキュウの姿はなかつた。

『ワン・』

キュウはあたしの腕の中だった。

『おい、大丈夫か？』

自分では氣づいてなかつたけど、あたしは必死にキュウを追いかけ
ていた。

マラソン選手が走りながらドリンクを取るようになたしは走りなが

らキューを拾い上げてそのまま佐原くんへ激突したんだ。佐原くんは激突した勢いで自販機に激突する。

つて事は、キューは助かってあたしも助かっただんだ！！

『キュー、ありがとうござみ』

分かれ道になつて佐原くんはキューに言つた。

でも、キューはあたしの腕の中ですでに夢の中。

「ただいまあ・・・」

『えー・?帰つてきたのー・?』

帰つて来た途端にぬれたの声がソビングから聞こえていた。

「えー駄田だつたー?」

『駄田とまでは言わないけど 帰るなり帰るで一言ここなれことよ
・ あなたの布団なにわよ?』

「えー?なんでもー?朝まではあったよねー?捨てたのー?」

『わおだよ・ まあ・ とつあえず今日はホテルでも行くのね。翌日
帰つてきなさい。明日までには布団とか部屋も掃除しておへし』

「ホテルつてドコのー?そんな金ないしー。うふ おぬれごめんな
いじー?」

『あ・千花おかえりー・ちょっと着替えてきたらコロシケあげてくれない?』

お母さんは電話をしていた。相手は相川 成海(22)。あたしのお兄ちゃん。

「お兄ちゃん帰つてくれるの?」

『もつ帰つてきんの。今成田だつてさつも電話来てね』

お兄ちゃんは通訳の仕事をしている。だから外国へはよく行く。

最近は海外口ケのテレビ番組にも呼ばれるようになった。

おかげで、俳優やタレントや歌手などのサインが家の玄関をうつくしてこむ。

佐原くんの了解サイン

『ボーカルやるけど?』

「つそー・マジ!?

梅雨も本番の日。

佐原くんはボーカルを引き受けてくれた。

あたしの未来予想図はもう止まることを知らない。
もう感情でしか考える事ができない。

ふいに朝、担任が言った9月の文化祭の出し物の話を思い出した。
クラスか学年で何かやる他にも全校生徒が主役と考えてこの学校に

は昔から体育館を使った個人の出し物がある。

そこでは漫才をやる人もいればダンスを披露する人もいるし、部活で出る人たちもいる。吹奏楽部とかチア部とか。

「これじゃん。

「文化祭まで3ヶ月ちよい！最初のデビューはじっから始めよ・よ！」

『　　はい？』

あたしの勝手な提案の勝手な決定によりあたしと佐原くんは文化祭で歌を歌う事にした。

湿気は憂鬱な気分にさせるとか今年の6月は違つ。湿気なんかに構つてられない夏がくる。

あたしの夢が一步前進した。

プアア・ツ「」

金色に輝くサックスやトランペット・テンポよくリズムを刻む小太鼓や大太鼓。

ピアノ フルート ドラム 鉄琴

吹奏楽部の軍団だった。軍団のトランペットの一人があたしに気づいて近づいてくる。

茶色い巻き髪の可愛らしい女の子。

楽器の音が煩くて普通にしゃべっても聞こえないからその子は大声

で『何がよつですかあ?』と訊いた。

「あの~音楽室空いてる日には教えてくれませんかあ?」

『ええ? 聞こえません!』

「あの~音楽室空いてる日には教えてくれませんかあ?」

『文化祭終わるまで使えないと思いますナビシ!?』

音楽室は吹奏楽部に占領されていた。

『教室でいいんじゃねえ? 屋上の鍵直されちゃったし』

『ねえ! あたしも一緒に居てこー! 』

放課後、教室で練習する事を莉子に伝えると莉子は楽しそうに訊いた。 もちろんあたしはOKした。

「ヒーリングやあ、何歌おうつかあ？」

『別に何でも』

「うーん やつぱポルノ？」

佐原くんの皿が

あたりまえじやん。

と囁いた。

てことで文化祭は佐原くんの好きなポルノを歌う事に。

尊のあたしひ

キイインッ

家から苦労して持つててきたスピーカーが気合いを入れた。

時刻は午後6時ちょい。

あたしの準備は出来た。佐原くんはとっくに出来ている。

窓ガラス^ビしに佐原くんとアイコンタクトをとつてあたしは赤いエレキギターを構える。

そして、弦を勢いよく撫でた。

静かだった教室に派手にエレキギターの音が響く。あとはあたしの指が佐原くんに合わせて動くだけ。

『新たな旅立ちに motorcycle オンボロに見えるかい?』
and oneはないけれど曲がるつもつもない』

窓ガラス越しに見た佐原くんはすく楽しそうだった。
言つほど一緒にいるわけじゃないけど、あんな楽しそうな顔、初めてみた。

見てるあたしや莉子までこの間にか笑顔になっていた。

『あの調子なら文化祭は心配ないね』
「マジだー。佐原くんが了解してくれなかつたらあたしの未来予想図は』
『未来予想図?』

「ん。まあ、とにかくあんな歌声してるんだし、いい人に決まつてんじやん！」

『それはもう聞き飽きたつつ、の』

『僕たちは自分の時間を 動かす歯車を持つていて』

佐原くんは気が付いているのかわからないけど、いつの間にか教室の後ろの方に男の子たち数人と前の出入口に女の子たちが何人かいた。

佐原くんの歌声とスピーカーから流れる音に混じって

あの人すごい
うまくない？

ヤバイねえ

つて聞こえてくる。

ここはステージじゃないし、明日香サンみたいにファンがいっぱいいるわけじゃないけど、一瞬夢が叶った気がした。

練習を初めてから3週間がたつた。

日に日に佐原くんの天才的歌唱力に驚く、ギャラリーたちが増え、最初莉子だけだったのが学年や先生たちを越えて有名になった。

『あ、ねえあんた。相川千花だよね?』

移動教室で廊下を歩いているとあの吹奏楽部の可愛らしい女の子に話しかけられた。

「はい?相川ですけど」

『あんたとさ、佐原ってバンド組んでる?』

「え、うん」

『桜にいい考え方なんだけど!5年連続県大会優勝の最強吹奏楽部とあなたたちで文化祭もりあげない?』

彼女は吹野 桜。

一個上の先輩だった。先輩が言つにはあたしたちと吹奏楽部で組んで、今年の文化祭最優秀団体賞を狙おうじゃないか。

という事だった。

あたしはもちろん大歓迎だった。ギターだけで寂しい所に5年連続県大会優勝の最強吹奏楽部がという名のオーケストラがついてくれるなんて、先輩の言つ通り文化祭は盛り上がるに違いない。

ただ佐原くんがなんて言つてくれるかだ。

『 いんじゃね？あいつが組みたがつてんだろ？..』

やつぱりやつぱり、あんな歌声してゐかるひ性格も裏切らない！

あたしの未来予想図は膨れすぎて溢れだしそうだった。

しかし

『は？ ポルノ？ 何それ - 趣味悪ツ - やつぱEXの方が盛り上がりがんじ
やない？ ねえ - みんな！』

『あ？ EX？ キモ 歌う氣失せるし文化祭も盛り下がるわあ』

『はー？ EX侮辱したヤツは宇宙ーの恥知らずだね！』

『てめえだつて 人の事言える根性か！？』

吹奏楽部は言い換えればEXのファンクラブ。
ポルノ大好きヤンキーは一步も下がる氣はない。

相性がわるかつた。

「 ひじや 間を取つてともとれーはー？」

しらけた。空気には

ないだろー。

と書いてあるぽかつた。

「 だよねえ
『 いんじやん?』

佐原くんだった。
先輩も、まあいつか。
といつ風に、口を尖らせてしまうなずいた。

最初の1ヶ月はそれぞれ個人練習をした。

『紗子が前奏入つたら4のリズムでフルートだからねえ』

先輩がピアノに向かって頷いたらそれが合図。ピアノから入つてフルート、あたしそして、佐原くん。

『

文化祭まであと2ヶ月。

『千花、競技何でる?』

「うーん やつぱ50じゃん? 他は出来ないよお~」

『だよねえ~』

文化祭の前にまず、体育祭があつた。

今年は50とかハードルとか個人やつてそつから学年種目いく。
あたしら2年はクラス対決、40人41脚やる。40人41脚はあ
たしらのクラスだけ。あと2組は37人38脚。あたしらのクラ
スだけ何故か人数多いから他のクラスよりもちょっと不利。
だからこそ気合いに入る。

『となると一応真ん中は相川やなあ まあ長瀬と小野やて今年
こそ来てくれるとは思つけど』

はあ? あたしつすか?

40人41脚の配列は男女分けてサイドに「デかい人」「チビ」の順。つまりはM型って事。あたしは女子背の順で前から三番目。でも、前にいる二人は一人は足骨折中。もう一人は登校拒否。だからいまんところはあたしが真ん中。今年は50とかハードルとか個人やってそつから学年種目いく。

あたしら2年はクラス対決、40人41脚やる。40人41脚はあたしらのクラスだけ。あの2組は37人38脚。あたしらのクラスだけ何故か人数多いから他のクラスよりもちょっと不利。だからこそ気合い入る。

『となると一応真ん中は相川やなあお前らも知ってるよおに、小野は参加出来へんから。まあ長瀬やて今年こそ来てくれるとは思つけど』

はあ？あたしつすか？

40人41脚の配列は男女分けてサイドに「デかい人」「チビ」の順。つまりはM型って事。あたしは女子背の順で前から三番目。でも、前にいる二人は一人は足骨折中。もう一人は登校拒否。だからいまんところはあたしが真ん中。

ピ———ッ！

笛の音が体育館中に響き渡る。担任がせーの「！」と声を張り上げあたしたちは足を踏み出した。

あれ　あれ？　れれれれ　！？

「　ちよまああッ！－！」

男女の一歩に差がある上に、サイドがだんだん端に行っちゃうから真ん中のあたしの足は両方に持つてかれて

「
『千花大丈夫　？』
「股痛あい」
『』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3551c/>

音色

2010年12月18日14時16分発行